

## 『陽気な黙示録』——オーストリア文化研究

中央大学人文科学研究所編 1994年4月15日発行

根 岸 喜久雄

本書は中央大学人文科学研究所内に設けられた、オーストリア文化、特に文学や音楽、絵画を研究する人々の「オーストリア文化研究」チームの研究成果である。16篇の文学関係論文、昔話に関する論文1篇及びグスタフ・マーラーを論ずる音楽論文1篇が、それぞれ表題を持つ五部に分けて収められている。文学論文の対象は第一次世界大戦前のオーストリア領土に相当する地域内で、世紀転換期から今世紀末に及ぶ時期に、ドイツ語で書いたか現在も書きつつある詩人、作家たちである。

「まえがき」によれば、本書は個別論文の集成であり、まとまったものではない。従って、また当然各論文の間には質的な差もあるので、各論文を個別に批評するのが適当と考える。しかし音楽論文はもとより、文学論文の中でも第五部の論文の対象は評者には殆ど或いは全く未知のものであり、評者にはこれらの論文を批評することは出来ないので、各論文の大意を汲んで紹介するに留めざるを得ない。また二三の論文は評者には理解出来なかったもので、——評者の不勉強は一先づ棚上げする——論評を避けた。

文学系の論文について総体的に言えることは、具体的に作品に即して展開される論文に説得力があり、読み応えが感じられるが、具体的な作品解釈を欠く論文は読者にフラストレーションを引き起こすという印象を受けた。尤も本書は「文学研究」ではなく「文化研究」の成果なのだから、作品論よりも、作品を生み出した文化的、歴史的時代環境及びその中における作家の種々の個人的条件に照準を定めた論文も有意義であり、傾聴に値するものがある。

## 第一部 オーストリアの心

文化複合としての昔話 ..... 飯豊 道男

論者は最もオーストリア的な昔話として「王様になった牧夫のこと」という話を挙げる。貧しい農家の息子が15歳位になると、鍛冶屋に奉公に出る。或る日小人が現われて剣を打ってくれる。息子は鍛冶屋を飛び出し、山上牧場に雇われ、怪物の大犬を剣で切り殺して三つの鍵を手に入れ、岩壁の鉄の扉を開いて、銅、銀、金の鎧兜、馬具を手に入れる。これを身に着けて三度馬上試合に勝った後に、彼は寡婦の女王（又は王女）と結婚する。論者は種々のヴァリエーションを参照し、各種資料を用いて、グリムの昔話との相違、この話が今でも語り継がれる土地が嘗て鉄鉱石の産地であったこと、山上牧場の歴史など、地理的、歴史的、文化的背景を論じつつ、この昔話のオーストリア的特性を論証する。

オペラ座のネストロイ …………… 新井 裕

ネストロイが劇作家として登場する以前の音楽家、オペラ歌手としての10年間及びそれ以前の音楽教育、修業時代の、表面的事実とこれを巡る数々のエピソードを辿る伝記。この論文からネストロイについてそれ以上のことを学ぶことは出来ない。しかし当時のウィーンにおける音楽教育熱、オペラ界の事情など文化の一端を窺わせる肩の凝らない読物になっている。

## 第二部 世紀末の揺らぎ

ユーゲントシュティールの音楽——マーラーの場合 …………… 喜多尾 道冬

音楽、絵画、文学の歴史の中に並行的に現われる理念の変遷に着目し、マーラーの1900年代の作品をユーゲントシュティールの音楽として位置付ける試み。音楽のソナタ形式、絵画の遠近法は調和の理念、普遍性の理念を目指し、論理によって理解出来る。1860年代にマネと共に色彩の復権が、ワーグナーと共に響きへの惑溺が始まる。これは論理から生理へ、倫理から官能へ、理念から現実への転換である。この転換に対応するのは文学では象徴主義である。この転換の背後には産業革命の伸展がある。産業革命を担うのは男性原理であるが、大量生産大量消費が可能になると、これは女性原理の台頭を促す。一方自然から断絶し、競争に疲れた都会の男達は女性を擬似自然に見立てて、そこに慰めを求める。ユーゲントシュティールはこの消費の多様化と多元化、女性原理の台頭と結び付いた芸術様式であると。マーラーのユーゲントシュティールの音楽として論者は「リュッケルトの詩による五つのリート」を論じる。

世紀転換期ウィーン都市文学の盛衰 …………… 高橋 慎也

本論は所謂「若きウィーン」派の文学の盛衰をその社会的背景から明らかにしようとするものである。確かに社会的背景については多く書かれているが、それと同派の盛衰(?)との関係は充分明瞭に示されているとは言い難い。作者達が変貌して行くのを衰退と言えるのか。「若きウィーン」という標章が合わなくなっただけではないのか。バルが掲げた標語が実現されなかったとして、それは作者達の責任だろうか。論者は「論者自身の読書体験から導き出された」二つの前提を立てる。第一の前提「文学と社会との間には密接な相互関係がある」という命題は今日では常識であろう。だが第二の前提「『価値指向』ないしは『意味指向』が文学作品の質的低下を招く」という命題は前提ではなくて、具体的に個々の作品を論じた後に結論として示されるべきものであろう。論者はこれを最早証明を要せぬ前提として片付けてしまうので、読者はフラストレーションに陥る。総じて一面的、独断的であり、論者が終り近くで僅かに数行を充てるホフマンスタールの『気むずかしい男』とシュニッツラーの『自由への道』の主人公に関する論述は理解に苦しむ。

エロスの遍歴——『輪舞』をめぐる …………… 田尻 三千夫

シュニッツラーのこの作品を万物の霊長が逃れることの出来ぬ、愛や生殖とは無関係に

肥大化した性本能の深刻さと滑稽さを虚々実々の軽妙な台詞のやりとりで描述する普遍的な文学作品と見るか、或いは登場人物の社会的身分などを重視して社会批判の（作者も期待した如く）文化史的記録と見るか。論者はこの二つの見方を踏まえて、言わば社会批判的文学作品として作品分析を試みる。特に第一景が娼婦と兵士（性と暴力、アプロディーテとアレース）であり、第四景から第六景（結婚・制度とモラル）がこの順序でこの位置に配されている作品の構成上の妙に注意を喚起する。示唆に富む論文である。

シュニッツラーの『ベルンハルディ教授』—— 性格喜劇としての観点から

..... 小泉 佐栄

ユダヤ人の病院長を主人公とする、物議を醸し兼ねないこの作品について作者自身が、これは傾向劇ではなくて、性格喜劇であると言っている。論者はこれに応じて、作品を紹介しつつ、的確明快に論述する。併せてこれが喜劇である所以、作者の懐疑主義、政治不信、倫理性等に説き及ぶ。

### 第三部 夢の変容

ホフマンスタールと表現主義 ..... 松本 道介

論者は所謂「ホフマンスタールの変容」というアレヴィンの倫理的解釈を批判しつつ、諸作品の読み直しを求める。先ずは『手紙』である。この作品は、従来所謂言語懐疑の表明と見做されて来た前半部ではなくて、言葉で表せない幻視の神秘的体験を見事な言葉で語る後半部に力点を置いて読むべきである。かかる神秘的体験は抒情詩で歌うことは出来ず、散文で報告する他ない。従って『手紙』は抒情詩との訣別の表明であるが、絶望ではなくて法悦を語るのであると。かかる神秘的体験を語るものとして論者は『手紙』から『ギリシャの瞬間』までの1900年代の10年間の散文作品を挙げ、これを表現主義的と形容する。これに対して1890年代の諸作品は印象主義的であると。示唆に富む論文である。

シュニッツラーと戦争——日記と作品『誘惑の喜劇』『池への道』をめぐって

..... 棗田 光行

シュニッツラーが第一次世界大戦の勃発にどんなに烈しいショックを受けたか、またその結果がどのように作品に現れているかを検証する試み。彼が徹底的な反戦論者、戦争非協力者であったことは既に周知のことと思われるが、それを日記によって検証する。論者は最終的完成はそれぞれ1924年と1926年だが戦時中に書き継がれた二つの作品の前者の中に、戦争直前のウィーンの各階層の人々の典型的な行動様式が、歴史劇を装った後者に政治に関与する者の思考行動、ユダヤ人問題が主題になっていることを指摘し、後者の主人公宰相マイエナウの人物の中に作者の代弁者を見る。

ホフマンスタールとリルケ——文学的世界の比較の試み ..... 戸口 日出夫

先ず本論文の各節の表題を掲げよう。

(一) 言語危機・語りがたき現実の開示 (二) 醜きものの語り (三) 美しきものの語り・古典主義的な調和と秩序の達成 (四) 時代の文体, 伝統の文体 (五) より高次の「語りがたいもの」・神秘主義的経験。

論者は、出自や活動の場を異にしたが、略同年令の両詩人の交流の伝記的事実、芸術上の相互理解もしくは相互不理解、上記の表題が表すテーマもしくはトポスをめぐる二人の体験、克服或いは達成の様態の相似と異同を、並列的にもしくは対照的に描述する。説得力ある、示唆に富む論文である。

夢の地形——ホフマンスタール、シュニッツラー、ムシルの作品から

..... 赤司 英一郎

論者は「現実」という概念の曖昧さと「夢」という語の多義性を意図的に最大限に利用して、「夢」というモチーフの意味の変遷(夢の変容?)に着目しつつも、三作家の異質な作品の間に断絶よりは連続性を見出だそうとるように見える。示唆に富むが、些か疑義を残す論文である。

というのは「覚める夢」、「覚めない夢」、「空想力」等の補足や言い換えにも拘らず、「夢」の語が概して余りにも比喩的に用いられ、その都度「夢」概念が不明確で、読者は混乱するであろう。「夢の地形」、「非言語的な意識存在」の語は評者には理解出来なかったことを告白する。

次の疑点は「マントヴァ近郊の田舎の邸宅での出来事は、恐らく全てが初老のカサノヴァの夢なのであり」という推論である。ここでは「夢」は精神分析の対象となる睡眠中の夢である。作者自身ではなくて、作者が極めて意識的に、フロイトに依存するか否かに拘らず、精神分析理論を駆使して構想する作中人物の夢を分析することにどの程度意義があるかというのが評者の疑問である。論者が引合いに出すフロイトの分析対象も作中人物のリア王ではなくて、作者である。論者による引用箇所直後で作者自身が「体験されたことと夢見られたこと」の区別をしている。「作品中の現実」(評者の語)という地平は許容せざるを得ないのではないか。論者はカサノヴァが決闘でロレンツィに勝ったという作品中の現実(体験されたこと)を不可解と言うが、論者のこの懐疑が評者には不可解である。

#### 第四部 迫りくる暗闇

ウィーンのヘルマン・ブロッホ ..... 入野田 眞右

ブロッホの誕生から亡命に至るまでの重要な伝記的事実を辿りながら、その都度の出来事についてのブロッホの言動を点綴して人物像を浮かび上がらせる。ブロッホの実業家時代、哲学、数学の研究から文学へ転向する経緯、前衛作家としての創作及び批評活動、それと並行して知識人としての社会的関心及び行動、各種の文化人との出会い、交友、対決、時代の危機に対する鋭敏な感覚、ナチス時代の予見等々、希望と絶望の間で揺れ動く誠実な知識人の姿が描かれる。

ヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』—— そのハプスブルク像をめぐって

…………… 小林 正幸

論者はガリツィア生まれのロートを「オーストリア的ドイツ人社会への同化に対する期待と幻滅の間を揺れ動く東方ユダヤ人」と規定し、本作品に「君主国への追悼の書」というレットルを貼ることに疑問を呈する。その理由としてロートのそれにそぐわぬ言辞、戦後の閲歴、彼の極度の韜晦癖 (mythomanie) 等を挙げる。そして本作品執筆の動機を当時のロートの悲惨な内面生活の対重として、時代的現実の対照である今は無きハプスブルクのオーストリアを辺境ガリツィアを舞台にして描く必要性に帰する。新しい研究に基づいて新しいロート像を提示する。

### 第五部 伝統への懐疑

もうひとつのオーストリア文学——アウスレンダーのチェルノヴィッツ…北 彰

我国では殆ど知られていない旧オーストリアの辺境ブコヴィナとその首都チェルノヴィッツの地誌及びそこに生まれ育ち、ナチスの強制収容所生活を体験した東方ユダヤ人の女流詩人の生涯を、解説付きの詩作品と共に紹介する。先ず彼女はホロコーストの詩人である。作品は素朴で、理解し易く、所謂現代詩への批判ともなっている。思想的には彼女は生を肯定し、彼女にとって世界は分裂していない。彼女は言葉を信頼している由。

パフォーマンスと懐疑——ウィーン・グループにおける〈伝統〉と〈革新〉について

…………… 前田 良三

オーストリアで唯一正統な前衛文学集団として 5 人から成る「ウィーン・グループ」の「地方都市」ウィーンにおける、1953 年の端緒から 1964 年の終焉に至るまでの文学的パフォーマンス、文学キャバレー等の活動を跡付け、その意味を探る。彼等の詩作品は実験文学であり、その核心は「方言詩」と共同作業による「モンタージュ」という言語実験である。ここでは抒情的自我は否定され、方言が純粋な言語マテリアルとなると言われる。

「第九の国」の夢——ペーター・ハントケとスロベニア…………… 平山 令二

オーストリアのケルンテンでドイツ人の父親とスロヴェニア人の母親の間に生まれたペーター・ハントケと母親の祖国スロヴェニアとの関係を考察する。自殺した母親の一生を描いた伝記『望みの満ちた不幸』(1972) と仮構の旅行記『反復』(1986) がその手掛りである。論者は前者においてハントケの母親への感懐を追求し、後者をハントケ自身の一種の自伝と認めて、ここにスロヴェニアに対するハントケの「生の声」を聴こうとする。『反復』の主人公にはスロヴェニアの土地は歴史を超越した永遠に農民的な理想郷、スロヴェニア民族の憧れの地、「第九の国」と思われる。かくして母とスロヴェニアはハントケの中で観念的に一体化し、スロヴェニアは母の国となる。しかしそれは飽くまでもユートピアであって、現実のスロヴェニア共和国ではない。というのはハントケはスロヴェニア人の独立国家の存在の必然性を認めないからであると。